

戦後70年 生きる伝える

第2回 衣服

1945年8月15日、太平洋戦争の終戦を迎え、ことし、その日から70年の年月を経ました。終戦直後に生まれた人も70歳という年齢を迎え、戦争の記憶も薄れていくばかりです。幼い頃に戦争を体験した成田市平和啓発推進協議会・戦争の語り部の皆さんから当時の生活の様子を聞き取り、今後、二度とあのような悲惨な戦争を繰り返すことのないため、ここに紹介することとなりました。

ア ジア・太平洋戦争は、多くの国民の日常生活に暗い影を落としていた。おしゃれもかなり制限され、派手な服装は「ぜいたくは敵だ」の掛け声の下で禁止されるなどの時代もあり、個人の自由が奪われていった。男性は化繊や木綿の国民服に戦闘帽、足にはゲートルを巻き、女性は着物にもんぺが当たり前になっていった。

高級な布地は、なかなか手に入れることができなくなり、戦火が進むにつれ食料と同様、衣料品も配給制となった。当然、新しい服など手に入れることはできず、着物をほどこいて子ども用の服を縫ったり、何度も使い回すことが当たり前だった。

佐藤弘子さんは、末っ子だったため、衣服のほとんどが姉たちのお下がりで、真新しい服など着たことがなかった。あるとき母親が、自分の帯をほどこいてもんぺを縫ってくれた。その柄がもんぺに似合わず派手で友達にからかわれた。

日暮和子さんは、母親の白かすりの着物で姉妹おそろいのワンピースを縫ってもらった。目印はガラスのように透き通った緑と赤のボタン。その赤いボタンがうれしくて幾度も眺めていた。ある日、スマトラに出兵する叔父に面会するため、横須賀の兵舎を訪ねた。その際、縁石の上を歩いていて転んでしまった。唇を三針も縫う怪我で、お下がりではない花柄のワンピースを血で汚してしまった。そのときのとても悲しかった気持ちは今でも忘れられないでいる。

今の時代のように毎日洗濯などできない時代。ましてや何着も着替えを持っているわけでもない。そのため、いわゆる着た



公津国民学校印東分教場に通う児童たち(昭和18年)(成田の歴史アルバムより)

きりすずめで、一週間近く同じ服を着続けていた。栄養不足のためか男の子たちはよく鼻水を垂らしていた。佐藤さんは、男の子たちがその鼻水を服の袖で拭い、拭いた鼻水が乾いて袖がてかてかと光っていたのを覚えているという。

これほど着物が貴重だったため、食料が不足したときには食べ物と交換することもあった。直接、農家へ持っていき、米と交換してもらうこともあったようだ。とはいえ、着物一振りと交換できた米の量はわずか一升。それでも、食料に困ったときには背に腹は代えられなかった。特に東京などから親戚が疎開してくると米が不足し、仕方なく着物を農家へと持っていき、米と交換してもらっていたそうである。それでもたった一升の米では何日も持たなかった。

今の時代、自分の好みで服を選び、何着もの服を持ち、その日の気分に合わせて着替えることができる。それが当たり前となっている現在、物があることの大切さやありがたみを感じることは難しい。この時代を体験した人たちにとっては、それがもどかしくて仕方がない。



同窓会のため少しきれいな服に身を包んだ20歳前後の人たち(昭和19年)(日暮淑さん提供)

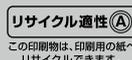
編集後記

やまのうえのおくら
山上憶良が詠んだ歌に「秋の野に咲きたる花を指折りかき数ふれば七種くさの花。萩の花 尾花 葛花 撫子なでこの花 女郎花 藤袴 朝貌あさかおの花」とあります。春の七草に比べあまり知られていませんが、これが秋の七草です。尾花はススキで朝貌は桔梗のことだそうです。最近ではこれらの草花もあまり見掛けなくなりました。秋の七草を探して「小さい秋」を見つけてみてはいかがでしょうか。

平成27年9月15日号 No.1299

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。